

## 第五回宮古島文学賞 選考評

「島」を考える作品の妙味

大城 貞俊

今回の応募作品数は七十九編、選考委員の手元に届いた作品は八編、慎重な審議を重ねて、一席に「山の女」（馬場広大）、二席に「夜行島」（仲間望）、佳作に「―銀游回帰―『スクが来た！』」（鳥光宏）を選んだ。本文学賞のテーマは「島」であるが、島を考える視点や方法を改めて考えさせる作品が多かった。このことが今回の応募八作品の特徴の一つであったように思われる。

第一席の「山の女」は島に嫁いで来て五十年が過ぎた和子の日々や感慨が、盆踊りを取材に来た息子（武史）との交流の中で浮かび上がらせた作品である。小さな山村で、年老いて、家を守り、生活することの様子が、村行事の取り組みの中でよく描かれている。方言を取り込んだ会話も絶妙な味わいを醸しだしている。「死んだ人に死んでいてもらうのが盆踊りじゃ」という特異な見解には、生きることの荘厳さと悲しみが込められているように思われた。やや不満があるとすれば、「島の女」ではなくタイトルのとおり「山の女」になっているのではないか。応募条件の「島」というテーマを曖昧にするのではないかと不安に思ったが杞憂であった。

二席の「夜行島」はネーミングも魅力的だ。「私」はインド旅行が好きだった従兄哲太郎の遺骨をガンジス河に流すためにインドを訪れる。旅の途次で列車で知り合った二人のインド人との交流を描いた作品だ。作品のユニークさは、「島とは何をもって島というか」という根源的な問を提出し答えを模索したことにある。そして「サウダージ」（心や魂の意）を巡っての論議で「この世には説明できないことがたくさんある」とする。「島」や「生きること」に対してラジカルな意味を問いかけた上質な作品に仕上がっていた。

佳作の「―銀游回帰―『スクが来た！』」は躍動的な作品だ。久しぶりに島に戻ってきた「ぼく（賢太）」が、二十年前の、祖父作次郎との日々を思い出す。少年の目を通して描かれる世界はグル

クン釣り、山羊の出産、そしてスク漁の話だ。これらはいずれも島にまつわる生と死の物語で、このエピソードを援用しながら語られる世界は島の神話的な世界である。「世の中みんないつかは戻ってくる」「死んだおばあも（スクになって）ニライカナイから戻ってくる」とする世界だ。躍動感と静謐さが織りなす世界は具体的な描写で豊かな島の日々を象徴しているように思われた。

他の五作品「あなたを連れていきたい」「おもいでにすむ」「金曜日のバス」「御嶽専門カンカカリヤ」「ブラックホールほとりで」も、安定した文体でユニークな視点と方法で島で生きることの意味を問うた作品だ。今一步入選作には及ばなかったが、「島文学」の広がりや可能性をも示唆してくれた。次回を期待したい。